



理事会だより (8・10)

木村和彦さん(七月二八日逝去享年九二歳)田淵令子さん(七月二九日逝去享年八六歳)に黙祷を捧げ、池田会長よりお二人のご功績の紹介があった。

- 一、令和五年度小田原秋季俳句大会(十月十五日)について①投句は百七十七名二六七組、当日参加見込み六九名と昨年度を上回った。選句締切は九月十五日(事業部)②大会当日の役割分担案の提示があり概ね了、九月理事会にて再確認することに。(総務部)
- 二、秋の吟行会は十一月一日(水)に大雄山最乗寺にて実施することとし、日没やバスの時間など検討して開催時間を決めることに。(会計部)
- 三、梅まつり俳句大会の兼題を九月理事会にて検討決定するので各自案を持ち寄ることに。(事業部)

理事会日程

9/14、10/12、11/9
(毎月第2木曜日 けやき15時より)

「俳句おだわら」10句抄(672号より)

伊藤道郎 抄出

柿若葉掴まり立ちの出来た朝
 白日の石ころ笑ふ青葉風
 片蔭や風の睡たさはしやく声
 網戸ごつん大きな羽虫お名前は
 空しさをそつとなでてく青田風
 制服を脱ぎて大の字金魚鉢
 草取媪臂は天向く高みかな
 さくらんぼ卒寿の夫の片えくほ
 青柿や少年という未成熟
 春眠し言い訳してもしなくても

守屋まち 抄出

文字摺の空を支ふる心意気
 毛虫焼く歳を忘るるほど生きて
 百年の杉戸の艶や走り梅雨
 伸直り明日は出来さう花菖蒲
 指きりのその後それきり合歡の花
 雨上り田に滑べるもの泳ぐもの
 辞書にない生き方もあり余り苗
 卯の花や箱根旧道一里塚
 祭足袋ほか一式を仕舞ひけり
 青葉梟鳴くたび青き闇深む

豊田 幸枝
 若村 京子
 峯尾ユキエ
 川合 昌子
 瀬戸とみ子
 小林 環
 佐々木重満
 小林永以子
 小澤 園子
 杉山あけみ
 川本 育子
 尾崎 一夫
 二見 和江
 菅野 英余
 木村 和彦
 小野 菊土
 石井千代子
 西賀 久實
 村場 十五
 田畑ヒロ子

■7月号(672号)「競詠10句」より4句鑑賞、4句抄出(1)

夏逝く

池田 忠山

迷宮へスマホの世界青嵐

須田 聡子

今の世にスマートフォンに取り残されている御仁はどのくらいおられるのだろうか。取り残されている人にとっては、右も左もわからないのだからスマホは迷宮の世界だろう。これからその迷宮の世界へ無理やり入れられてしまう小生にとっても、青嵐どころの嵐ではない。作者もきつとそうなのだろう。

川下へ風を道連れ里若葉

田中 幸子

遠い昔を思い出しての一句と拝察した。道連れになつたのは幼なじみだろう。下五の「里」若葉が効いている。初夏の句ではあるが、どこからか童謡「春の小川」が聞こえてくる。いつまでも童心を失わない作者に羨ましさを覚える。

夜濯や一等星に干す道着

陌間みどり

道着を濯いでいるのは、当の本人であるという解釈も可能だが、ここは、この子の親として読みたい。稽古に余念のない子の道着を、その親は「一等星」に干

■7月号(672号)「競詠10句」より4句鑑賞、4句抄出(2)

朱夏

瀬戸 りん

竹の子や屋敷墓守る十代目

田中 幸子

屋敷の裏の竹林。広く盛んなそこに、今年もよきよきと竹の子が出てきた。せつせと掘って、親類や近所に届ける。そこは代々の一族の墓がある場所でもある。先祖に見守られ、竹の根のように着実に一族は繁栄。先祖に感謝し、日々の生業を誠実にこなす十代目の、穏やかな生活と誇りが見えてくる。

夜濯や一等星に干す道着

陌間みどり

今日はよく頑張つて勝ち残った。たつぷり汗を吸い込んで今日一日自分を支えてくれた道着を、労う様に洗う。力を込めて絞り、何とか降り捌き、引つ張つて形を整え物干し竿を高く掲げる。ああ、一等星が光っている。明日はあそこを目指してゆくのだ。あの星のように堂々と戦おう。悔いのないように。

雨あとの池の眩しき茅の輪かな

古屋 徳男

雨が上がリ、雨に洗われたような日の光が、神社の池面に踊っている。今日は夏越の祓。半年間の穢れや

したのだ。「等」という表記が効いて、明日こそ一等賞を獲ってもらいたいという願いがひしひしと伝わる。

吹き晴れて山の色濃き曝書かな 古屋 徳男

作者の見上げる山なみは、梅雨が明けて吹き晴れている。梅雨の間、霞んでいた山は、いよいよ緑の濃さを増している。こんなときこそ、待ちに待った虫干しシーズン到来だ。どんな書を曝したかは明らかにしていないが〈吹き晴れて〉の一語が効いて涼味満点である。

曲がること知らずに育つくしんぼ 伊藤 道郎

この地球を憂う眼差し梅雨の月 加藤かほる

搾りたての蜂蜜の味青あらし 川本 育子

阿でもなく昨でもなくて夏蜜柑 寶子山京子



災厄を、茅の輪を潜って払い落とそう。こんな晴れやかな日なら、猶更、清々しく生まれ変わったような気分になる。今年もあと半年、日々の過ぎる速さに驚きながら、一日一日を丁寧に生きていきたいと思う。

はたた神ひがなとろ火を構いたる 寶子山京子

ひがなとろ火を構うものといったら何だろう。ジャムか佃煮か煮込み料理か？とろとろ何かを煮詰めたり煮込んだりするの豊かな時間、そして深い味わいにつながる。しかし、そこにはたた神！一気に不穏な厨になる。薬草を魔女が煮込んでいるのか？或いは心の中の膨らんでくる思いを何かの形に煮詰めようとしているのか？想像の膨らむ一句である。

鳥雲に将棋くずしの擦過音 伊藤 道郎

本当の息存分に夏野原 加藤かほる

遠心機よりの蜂蜜初夏の色 川本 育子

あぢさゐの葉蔭はやさし猫の径 須田 聡子

* * *

俳句おだわら(8・19メ切り、到着順)

◆小田原鹿火屋(7・28)

久江報

夫婦坂二人三脚白日傘

足立 和子

草原は風の形に晩夏かな

川本 育子

せせらぎの晩夏の水音となりてをり

高橋 小糸

函嶺の襜の深きや晩夏なる

山崎 悦子

耳奥に瀬音集めて涼しかり

近藤 久江

◆香雨・梅ごち(7・23)

忠山報

フルートの音色すずしき夕べかな

肥後ちさこ

炎昼の日ざし届かぬ結界門

関戸わよこ

日盛にとび込む路地の喫茶店

青山 典子

今もなほ壁に掛かりし登山帽

門松 鳳文

日盛にサイレン三度救急車

吉田 百代

山門の赤き大下駄揚羽蝶

吉田 康雄

本堂に座せばたちまち汗の引き

陌間みどり

敷石に猫べつたりと日の盛

小澤 純子

木下闇ゆけば遠のくものの音

池田 忠山

◆こよろぎ(8・10)

つとむ報

湾上の花火の先の遠花火

高杉掘三朗

やつと来た白神山地滝の音

板谷 雅泉

雨ながら日矢一筋の滝開き

植松テル子

母の声姉の声聞く遠花火

神山つとむ

◆春野(7・16)

きよ志報

みんみんも瀬音もなべて山の音

秋山 昇

パラフィン紙のやうな水面や望の月

伊藤はる子

しばらくは膝を抱へて端居かな

内田知江子

手に汗を心に汗を骨拾ふ

尾崎 一夫

悪態を吐いてもみたき暑さかな

瀬戸 悠

帚木の森お嘶が生まれさう

二見 和江

野に浮くは螢と戦死者の御霊と

長谷川きよ志

◆沈丁(8・3)

寶子山報

無口なる夫かたらひに星月夜

若村 京子

ゆるぎなき色となりたる秋の茄子

柳澤ミサ子

星月夜大喚声の外野席

田中 恵一

はは逝く日耀いてゐる星月夜

河本 純子

テントが一つ公園の星月夜

瀧本 敦子

重なつて落ちてこないか星月夜

勝木 澄子

の野良猫の瞳はアクアマリンよ稲の花

菅野 英余

山宿の語らひ尽きぬ星月夜

高井 幸子

外つ国の片言まじる花野かな

片野 節子

星月夜積み木の家に灯がともる

峯尾ユキエ

箱根処暑野風がはこぶ雨ひと粒

清水美代子

積み年の重い戒め終戦忌

松下 俊之

木づくりのベンチにひとり星月夜

武居裕美子

夏野にはもどさぬ猫の光りだす

寶子山京子

◆みなみ(7・15)

かほる報

蝉しぐれ嵯峨野を渡る青い風

豊田 幸枝

宿いでてバスを待つ間の小夕立

齊藤 静

たたなずくことも楽しと入道雲

小瀬村信子

雲の峰見舞う心を整えて

柳川 紀枝

蝉啼くや五感をほどく土の道

加藤 富江

蝉声やゆつくり卒寿の青信号

加藤れい子

蝉しぐれ石段一つづつ上る

加藤 健治

少年の背丈伸びしや雲の峰

市川めぐみ

正義とは？向日葵直と我を向く

加藤かほる

◆青梅(8・2)

幸子報

風鈴の音色が誘ふ心地好き

大塚 行人

長茄子の葉影に細き光さす

湯本とし子

涼しさや如意輪さまの細き指

加藤まり子

吹き抜ける風に初風をさがしけり

久保田トミ子

十六夜の風を羽織りて鳥巡り

田中 幸子

◆おほる(8・9)

秀泰報

山の日や足柄古道風の径

中根登美子

危険です地球沸騰の暑さかな

中津川晴江

朝顔の登りつめたる矜持かな

石井きよ子

朝顔や旅する様に咲いて散る

小野 菊土

黒雲と交信してる葎かな

二上 光子

暮れ方の欄間に絡み付く残暑

横塚 昌平

仏壇のお鈴の音や秋立つ日

石井千代子

ひょうたんの町とどろかす鳴子の輪

瀬戸とみ子

夕焼の海に一筋光る道

廣田 悦子

朝顔に励まされたる一日かな

中村 昌男

徹頭徹尾水を捧げる原爆忌

加藤 春江

炎天下音だけ響くビル工事

香川 花子

秋簾緩り揺るぎし人を待つ

高橋みどり

夏の星耳に届くは深夜便

風間 秀泰

◆たけのこ(8・10)

悦女報

夏祭海の男の權伝馬

三木 泰子

今朝も来て初穂ついばむ雀どち

徳田 公子

蝉時雨ふと鳴き止みて無の世界

久津間百合子

折りたたむ熱気のままの白日傘

小宮 早苗

この頃の吸引力に負けトマト

宮崎 悦女

◆山北(7・27)

由里子報

丹沢の一人歩きや合歡の花

和田恵美子

真夏日やにこにこ顔の送迎車

尾崎 幸子

ペイズリー柄のバンダナ夏の風邪

星 一義

裏返す塩吹く梅の煌めいて

石田加津子

さくらんぼ又買ひ替えるトリーシューズ

竹下由里子

◆鷹(8・5)

十五報

夏の夜や書きては捨つる身上書

青木 孝子

審判の大きな身振り雲の峰

池田 令子

老僧の先づ外したる汗手貫

西賀 久實

菜園の唐黍実り主逝く

佐宗 欣二

遊覧の艫の日の丸雲の峰

須田 晴美

夕涼や刺身のつまの桂剥き

中田 笑子

夏菊やメモリアルフォト見入る通夜

百川 秀子

雲の峰初戦突破の球児吼ゆ

山崎美知子

幼子の真つ赤な帯や星祭

柏木 良花

巻き上がる緒き錨や雲の峰

庄司 下載

新涼や組子ぴしりと指物師

瀬戸 りん

石階にわが影折れて灼けるたり

高橋久美子

帰省子に八ヶ岳雲上に浮きにけり

中山智津子

ベルばらを一気読みせりソーダ水

齊藤 桂

子鴉に空重たき雨上り

芹澤 常子

夜の秋ラジオの歌に声合はせ

大木 敬子

新涼や目覚め良き日のクロワッサン

大島美恵子

とびうをの飯菜貫ひもひと昔

田下 昌人

思ひ出し笑ひして喰ふ西瓜かな

中根 和子

踏みつけて酢漿草かたばみと知る朝の庭

加藤 幾代

炎昼やエアーストにヘルメット

高橋千代子

埴輪館我が白靴の響きけり

守屋 まち

息荒く登る百段青胡桃

米山 翠

大雨に沈みて見えぬ早苗かな

來田 新子

赤まんま瓶に挿されて厨窓

大沢 年子

衣被人付き合ひは六分まで

片野 秋子

衣被老いて自在の時間かな

小林 環

御早うとチーストースト小鳥来る

下平 美子

般若心経唱へ宴や衣被

鳥海 壮六

打水や峡の蒼穹広がれり

古屋 徳男

閉店のままが長きぞちちる虫

村場 十五

◆実のり(8・17)

たか志報

朝顔に小粋な名前団十郎

岩本ひさみ

割箸に梅の色香や土用干

杉本 久子

蓮咲くや天守にとどく落し物

木村 幸枝

夜の秋目葉の減り早きこと

◆零（8・17）

孫揃ふ大阪弁の暑きかな

青柚子の目をして少女席ゆずる

流れ星秋の夜空を駈け抜ける

日々事件心の憂さや立葵

戦争の碑にささやける蟬の殻

秋の灯や何でもありの雑貨店

荒む母に娘のリセットさくらんぼ

◆草むら（8・18）

流れ星漕げど帰れぬ伝馬船

胎内に曼陀羅ねむる朧月

木魚の音に鉢蓮開くかな

◆無所属

十寸穂のすすき地球の壺をはみ出せり

水中花星の貧しき町に住み

目高買ふ店主の蒔蓄付きで買ふ

雲の峰翔平・朗希も南部藩

娘の姿眼裏に夏の院

蚊遣火や一汁一菜ひとりの餉

石段の下に思案の子バツタや

新井たか志

史郎報

青木たけを

伊藤 道郎

川合 昌子

佐藤 正子

中村 裕子

野川木一路

岡本 史郎

重満報

石井 秀稀

佃 悦夫

佐々木重満

小林永以子

島 梅乃

出澤 洋子

北村 文江

田代 孝子

一ノ瀬茂代

岩楯惠津子

砂かぶり浴衣美人の柳腰

ひとのいのちを見た次の日の朝顔

一日じゅう朝顔吸つてるシャイなやつ

桑の実の味を知るのは昭和の子

蟬しぐれ焼きたてパンの列に入る

暑き日や梯子に置かれたる軍手

羽抜鳥若沖の絵にもどれない

不器用に笑つてばかり半夏生

火花果て後は潮の香波の音

窓全開遠富士を背に揚花花

あさがほの葉のざわざわや正露丸

八月や地球にもある沸騰点

女王蜂と子分の蜂が二・三匹

鳳仙花はじけて幼胸に手を

炎帝の鬱穴のない五円玉

知恵の石詰めたる鳥居八月潮

大佐田うづき

大石 雄介

大石 和子

神野美代子

木村美千代

山田 照子

田畑ヒロ子

穂坂志げる

山本 すみ

山口 千代

須田 聡子

小澤 園子

瀬戸 正洋

蓑宮 わか

杉山あけみ

杉崎 せつ

無所属会員の皆さまへ

「俳句おだわら」への一句を毎月19日必着で

お待ちします（葉書にて）。（広報部）

宛先・250-0042 小田原市荻窪五四九-17

村場十五

石田加津子

白日の石ころ笑ふ青葉風

若村 京子

石ころがコロコロと笑ったのだろうか。いやケケケといやクスッと笑ったのだろうか。普段目にして
いる石ころが笑って見えたという表現に、作者がじつと石ころを眺め入っている姿が見えました。

白日の「白」、青葉風の「青」の対比に緑を渡る風の清々しさを感じました。昼中の何げない風景に作者の遊び心が垣間見えて、私もこの様な句を目指したいと思いました。

河本 純子

夏雲や網を繕ふ猟師の背

中根 和子

私がすぐに感じたのは夏雲でした。夏雲の照りつけるような強さに負けず、猟師は網を繕ふ。負けるものかと一心に網を繕ふ。下五の猟師の背には、日に焼けた猟師独特の肌の色が塩をふいたようで、いわば雑草の強さに通じる所がある。私は母を失ったばかりで、気の強さだけで生きていくような所がある。これからひとり暮らししていくのも、猟師の背のような強さであると10年は生きていきたい。

庄司 下載

春は塩っぱし青年海へトランペット 伊藤 道郎

潔く技巧の効いた句である。青春といえども楽しい事ばかりではない。それを春は塩っぱしと言いつた。青年が出てくるので春は青春を想起させるのである。春は人生の節目となる事が多い季節、そこに何が有ったのか。

春は塩っぱしから始まって一直線にトランペットへと突き進む句勢がトランペットの音の力強さと、それでも前へ進もうとする青年の強い意思を巧みに表現している。

肥後ちさこ

鮎跳ねて光を撥ねて水匆ねて

新井たか志

光る川面や水音など、釣り経験のない私にもまるで実況中継の様に鮮明に鮎釣りの映像が伝わって来ました。

十七文字のうち上五に「鮎」中七に「光」下五に「水」の三文字を配置して、他はそれぞれ異なる漢字の「はねて」のリフレイン。一瞬一瞬をとらえた映像の伝達が見事。

リフレインの効いた調べの心地良い、楽しく印象的な句と思います。

齊藤 静

初秋や生絹のごとく雲流れ
阿波踊りかがやき揺れるイヤリング
花の道どこ歩いても風の音
門いでてバスを待つ間の小夕立
山荘の昼の閑けさ蝉しぐれ

北村 文江

手さぐりの未来をよぎるサンガラス
三叉路は人の迷ひ路立葵
逢魔が時蜂にさされし誤算かな
香水を呆れる程に揃へけり
海沿ひの「びいどろ工房」ソーダ水

伊藤はる子

夜は夜の佇まひなり水中花
小気味好き下駄音させてアロハシャツ
三伏やうしろ三両切り離す
ゆつくりと雲離れゆく山開
晩夏光女性限定一人旅

石井千代子

場外へ高校球児の応援歌
夏風邪やはずしたマスクまた付ける
遠泳の応援若き日ひきよせる
無農薬されど良品夏野菜
線香花火絆が光る闇の中

野川木一路

溶岩を包む木の根や秋に入る
浪の峰きらりと光る星月夜
暴れ梅雨旅せる街を壊しおり
奥只見小さな花野見つけたり
東方の門絶筆居宅磯は秋

中田 笑子

萩叢を分けて飛び石躰口
朝鈴や土曜の朝の草野球
盆東風やソーラーライト点りたる
満月やギリシヤ土産の鈴の音
天高しメタセコイアの並木道

田下 昌人

夜店ポポポアスレチンガスラムプ
葎菜を憎みかつなほ愛しきやし
旅人か帰省のひとつか鄙駅舎
夏掛けを剥いで腹巻利休ねづ
砥部焼の大胆呉須や川床のうへ

高杉掘三朗

砂山とビーチパラソル絵日記へ
まつさらな畳のかをり盆提灯
露天風呂管弦楽団蝉時雨
夕立のランドひとつ野球帽
台風圏束の間の星のぞきをり

令和5年度小田原秋季俳句大会

第一部 作品募集

兼題 「星月夜」「花野」(いずれも傍題可)各一句

一組 未発表作品に限る。

賞 小田原市長賞以下二十位、選者特選賞

第二部 俳句大会

日時 令和五年十月十五日(日)

会場 おだわら市民交流センター(通称UMECO)

受付 十一時 投句締切十二時

開会十二時半 終了十五時半(予定)

整理費 五百円(呈飲み物)

当日題 秋季雑詠二句 総互選

賞 小田原俳句協会長賞以下五十位

*お願い 会場では飲食可能です。

参加人数が多数見込まれますので、感染防止対策に

ご協力ください。

★当協会員で令和四年十月三日(令和4年度秋季俳句大会翌日)から五年十月十五日(秋季大会当日)に満年齢で還暦、古希、喜寿、傘寿、米寿、卒寿に達する寿齢者への恒例の表彰を行います。(表彰は投句条件)

〈主催〉小田原俳句協会 〈後援〉各地俳句協会

新作5句

松下 俊之

鈴虫や風止み空へ澄み渡る
へっぴりの腰に沸き立つ宮相撲
事無きの祈りも込めて魂送
母鶴鴿すまし寄り来る野良の中
鳴きやんだ何がどうした法師蟬

秋の吟行会のお知らせ

日時 令和5年11月1日(水)

会場 大雄山最乗寺 南足柄市関本

受付 いつもより早くなる見込み

当日囁目3句を短冊にて

会費 五百円(賞品・参加費などに充当)

句会 信徒会館

*細部項目は追ってお知らせします。